

# 「一種のフーコー主義」の内奥

—— 金森修の方法について ——

稲 田 祐 貴

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

## 「一種のフーコー主義」の内奥

——金森修の方法について——

稲 田 祐 貴

### はじめに

金森修が残した多大な量の研究成果は、科学論・文化論・思想史などの幾多の領域と、多岐にわたる研究対象を含み込んでいる。本稿ではそのなかで、もっとも原理的・方法論的側面について考察する。すなわち、金森におけるM・フーコーの位置の滴定である。

金森に対してフーコーが与えた影響は絶対的なもののように思える。というのも、科学社会学や医療倫理学的な仕事はフーコーの生権力論の地理的・歴史的な拡大・敷衍と言いうるし、金森自身が自伝的記述を含んだ論考のなかで、「私の学問的作業の理論的主軸には、一種のフーコー主義がある」と告白しているからである（『科学思想史へのオマージュ』『科学思想史の哲学』岩波書店、二〇一五年、五五頁）。金森がフーコーから受けた影響は一連の成果を貫く方法論的な態度にまで及んでいることに疑問の余地はない。とはいえ、フーコーの思想を継承するにあたり、その仕方がどのようなものだったのか、フーコーの何を継承したのか、あるいは、そもそもそれはフーコー固有のものなのか、といった観点から考察することも可能である。先程の引用で「一種のフーコー主義」と若干の留保がなされているところに立論の余地があるのではないかと本稿は考えるのである。金森の「理論的主軸」である「一種のフーコー主義」の内実はどのようなものなのか。

### 聖化を避け、拡大させる

金森はフーコーを継承するにあたって、それを教条的な仕方で行うべきではないと主張してきた。この姿勢は比較的初期の論考のなかで「この偉大な学者〔フーコー〕の仕事を引き継ごうと望むのであれば、なによりも避けるべきなのは、彼自身を聖化することである」（『フランス科学認識論の系譜』勁草

書房、一九九四年、二九八-二九九頁）と警告していることからもうかがえる。フーコーの思考を聖化せずに継承するために金森が採った戦略は（１）フーコーが提示する概念やテーゼを、鵜呑みにすることなく批判的に吟味し、肯定的な要素を抽出する、（２）その肯定的諸要素についても、そのままそれらをまとめあげてフーコー論として再提示するというよりは、フーコーが扱わなかった対象や領域に適用できるように換言作業を施しつつ、実際に分析・総合してみせる、というものであった。

とりわけ（２）の作業はフーコーを否定するものではなく、むしろ肯定するものであると注意喚起されている。それはフーコー自身がその経歴のなかで、その時その時の関心に沿うように過去の業績の意味内容を定式化しなおしてきた、という事実裏打ちされた主張になっている。金森は次のように言う。「フーコーの〈換言〉作業を私なりのやり方で換骨奪胎し応用したとしても、それはフーコーに対する裏切りというよりは、フーコー自身の延長ということになるのではなかろうか。〔中略〕フーコーの著作の表面的な表現をよりフレキシブルに変換して、ある特定の概念がもちうる指示領域を、もちろんその輪郭は不変なままにしておきながらも、かなり自由に変更して、普通は潜在的なままでいる一連の問題群を浮上させてもよいという許可を、フーコー自身の換言作業が与えている」（二四〇頁）。ここから、金森の「一種のフーコー主義」という表現には金森の方法論とフーコーとの間に一定の距離が生じているという意味での留保が含まれていることがわかる。すなわちそれはフーコーが直接的に論じた内容を扱わないという意味でフーコーからの距離を否応なく感じさせてしまうものではあるが、それはフーコーからの切斷や離反によって生じる距離ではなく、フーコーが提示した概念を変形し、他の諸領域や諸対象へと接続させるための延長作業から生じる距離であるという意味である。

## 「客観性の政治学」の固有性

(1)の作業についてはどうか。金森がフーコーに対して与える評価には手厳しいものがある。たとえば、さきほど引用した『フランス科学認識論の系譜』において金森は、監獄や精神医学についての膨大な資料分析を通して形成されているフーコーの権力論について、「近代の規範的テクノロジーの様態描写」としての巧みさを備えているものの、「規範そのものの存在論」にまで論究しきれていない点を問題視している。つまるところ、フーコーの権力論は規律に対して「なぜ反抗であって、遵守ではないのか」という問いに解答を用意しておらず、理由なき規律への反抗を説いているのではないか、というわけである(二九八頁)。後年に書かれた『〈生政治〉の哲学』(ミネルヴァ書房、二〇一〇年)においても、金森のフーコーに対する姿勢に大きな変化はみられない。本書の中核をなす概念であるかにみえる生政治概念もフーコーの記述からは確定的な概念規定を得られないため、その多様性を記述する方に向かうべきである旨が記されている。『〈生政治概念について〉、〈拡大適用〉を支えるような原義はほぼ存在しないとさえ述べていいほどなのである。[中略]〈生政治学〉は、良くも悪くもフーコーという〈親〉の手を離れ、現在、それぞれに百花繚乱の状態にある。意味は拡散するが、その拡散の様態をそのまま辿り分節することの方が、擬似的な考古学によって真贋の査定をするというような眼差しよりは生産的なのである』(四四頁)。

『〈生政治〉の哲学』において肯定的に取り出され、基軸とされるフーコーのアイデアは生政治概念ではなく、「真理の生産」というアイデアである。この発想は金森の著作の随所で見受けられるもので、「反自然主義」、「客観性の政治学」といった表現で換言され、応用されてきた。これは真理が普遍的でいつでもどこでもだれにでも妥当すると考える自然主義的真理観と対立する、ある時期ある場所でのみ妥当するような「しばしば預言者、占い師、幼児、盲人、狂人、賢人などを介して告げられる真理」であり、フーコーの議論は「それによって同時代の一般人たちが統合的に動いた一つの儀礼・装置、そしてその装置を成立せしめていた一つの真理観の存在を見て取る」ものであると整理されている(六一頁)。このアイデアについて金森はポストモダニズムといわれ

る潮流のなかで、いまだ意義を失っていない継承すべき要素として評価できると述べている。「フーコーもその一角をなしていた(ともいえる)ポストモダニズムの〈哲学素〉が幾つかある中で、いまでも無意味化していないものがあるとするなら、この〈客観性の政治学〉も、その一つではないかと私は考えている。[中略]客観性は、与えられたものに接近するという漸近的な安定性を失い、闘争や戦略の果てにかろうじて獲得されたように見える一瞬の理念のようなものになる。客観性の存在価値は流動化し、固体よりは霧のようなものに近づくのである」(『〈認識の非自然性〉を頌えて』『知識の政治学』せりか書房、二〇一五年、一四〇―一四一頁)。

とはいえ、金森自身が指摘しているように、このアイデアはフーコーに固有のものではなく、フーコーのニーチェ主義を強調したものである点に留意せねばならない。すなわち、金森の「一種のフーコー主義」における留保は思想史的な側面からもなされており、それは、金森がフーコーから取り出す「客観性の政治学」という発想が思想史的観点からみるならフーコーのみに還元されるものではないということである。「以上のような[真理の生産のような]特異な真理観は、西洋思想上全く孤絶したのではなく、その背景にはニーチェ(Friedrich Nietzsche)の影響が決定的」なのであり、「フーコーは、ニーチェを格好の援護材料として使いながら、自ら、思想史を、永遠の人間性や永続的価値への漸近的接近や模写のための営為としてではなく、背後に常に特定の認識関心を潜ませた僭称的小真理群の闘争の場として把握するのである」(『真理生産の法廷・戦場・劇場』『知識の政治学』一二―一二二頁)。さらに付け加えるなら、これに近い発想はフーコーやニーチェに限らず他の思潮にもみられる。クーン(Thomas Kuhn)のパラダイム論に代表されるような科学哲学における脱実証主義の流れがその典型であるが、金森においては新カント派、とりわけカッシーラー(Ernst Cassirer)の影響は小さくないと思われる。金森は、研究をはじめたかなり初期の段階で、カッシーラーの反実体主義的なテーゼとその科学史的俯瞰作業に「文字通り打ちのめされた」と語っている(『書物が私を作った』『哲学の歴史 別巻』中央公論新社、二〇〇八年、三七五頁)。

「客観性の政治学」とは対照的に、金森がフーコーから取り除こうとするのはその左派的・政治闘争的

傾向である。それは「なぜ反抗であって、遵守ではないのか」という批判からも読み取ることが可能であるし、先程の引用からも、金森の主要な関心はあくまでも「真理」や「客観性」についての抗争にあり、それは大学・学問・科学の枠内でなされる争いに限定されていることがうかがえる。金森のスタイルは、政治闘争とは距離をおき、科学史・思想史的作業に集中する姿勢だけをみるならば、フーコーよりはカッシーラーに近いと言えるかもしれない。

金森がこうした限定を解除して、一般的な意味での政治について活発に発言し始めるのは3.11以後である。しかしながら、震災に関連する一連の政治的発言の背後にフーコー主義の存在を認めることは、科学批判の文脈を除けば難しい。たとえば、震災から二年経った二〇一三年に書かれた論考においては、今も続く当時の情勢について、フーコーの理論構成がもはや意味をなさなくなり、放棄せざるをえないと述べるという逆説的な手法によって、その悲惨さを訴えている。「『人民を生かしておく』どころか、今後何年もしてから、少なからぬ人々が晩発性放射線障害で死んでいく可能性がある時に、因果関係が特定困難なのをいいことに知らぬふりを決め込む姿勢を貫こうとしている国家にあっては、櫛の歯が欠けていくように人知れず逝去していく国民を統治するその様態の中に、〈生政治〉の影を見て取ろうなどという気持ちには到底なれない」（『合成生物

の〈生政治学〉』『知識の政治学』二二〇-二二二頁）。

## おわりに：フーコー主義のさらに奥

震災以後の政治的発言の背後にある、フーコー主義を取り去った時に見えてくる思想とは何か。ここで明晰な解答を提示することはできないが、金森が晩年、「常識派」の思想史を記述していることが手かりになるように思われる。金森は『動物に魂はあるのか』（中公新書、二〇一二年）において、生命を軽んじる社会に対して「常識的で微温的な反応」でもって抵抗すべきであり、それが歴史的にも有効であったと説いている（二二七頁）。「われわれはごく普通の人間として、命に対する普通の直観を大切にしながら〔中略〕生き続けよう。現代のような激しい生命操作の時代の中で、その平凡さ、その鈍さ、その退嬰性は、むしろ貴重な性質なのだ」（二四二頁）。このように説く金森の背後には、フォントネル、ライプニッツ、ヴォルテールらのテキストを整理しつつ提示されている「常識派」の思想史が確かに息づいている。もちろん、金森の仕事は、この「常識派」の系譜のなかでも動物についての哲学的考察のみを照射したものであるから、断片的なものに留まっている。金森の方法論を探る上での次なる課題は、この「常識派」の思想史の拡充と精査であるように思われる。